

なぎさ通信

葛西臨海水族園 周辺の海から

第33号
October 2009

タイトル写真：建設中の葛西臨海水族園（1988年）

開園 20 年の葛西臨海公園

葛西臨海公園は 1989 年 6 月に開園し、今年で 20 周年を迎えます。この広い公園、できる前は何だったかというと、実はすべて海でした。臨海公園だけではありません。江戸川区のうち、地下鉄東西線より南側のかなりのエリアはつい 40 年前まで浅い海で、あたりは有明海や伊勢湾に匹敵するほど広大な干潟だったのです。

数百年前からこのあたりは漁村で、浅くて豊かな海は、夏はアサリやハマグリ、冬は海苔の産地として知られていました。江戸時代、「浅草海苔」は葛西産の海苔で作られていたほどです。こうした葛西沖の海も、東京が大都市になるにつれて、とりまく環境が変わってきました。高度経済成長期の 1970 年代、この浅い海を埋め立てて住宅・産業用に新しい街を作ろうという開発事業が始まり、清新町や臨海町は 1980 年代に陸となったのです。しかし、生物の豊富な浅い海や干潟をすべて埋めてしまうと、東京湾の生態系を変えてしまいます。そこで埋め立て地の南端は大きな公園とし、その沖に人工干潟を作ることになりました。これが葛西臨海公園・海浜公園と「西

なぎさ」・「東なぎさ」です。

21 年前、オープン以前の臨海公園は、見渡すかぎり一面の草原で、チョウゲンボウやコミミズクが低空を飛び回っていました。京葉線は開通したばかりで駅前には何もなく、建設中の水族園への仮設道も、公園造成工事の関係で日によって違うルートです。当時の写真を見ると、水族園周辺から渚橋まで、建物どころか木が 1 本もなく、やたらと見晴らしがよいことがわかります。海の中も人工干潟の環境がまだ安定しておらず、カニやハゼの稚魚は今よりずっと少なかった記憶があります。

そして 20 年、公園の樹木はすっかり立派になって、昆虫やクモなど見られる生物も増えてきました。春先に鳥類園の池に集まるアズマヒキガエルは、きっとみな臨海公園で生まれ育った個体でしょう。生物保護のため立ち入り禁止になっている「東なぎさ」では、東京湾で絶滅危惧種となっているトビハゼが繁殖しています。20 年後、ここにはどんな生物がいるのでしょうか。

（教育普及係 井内岳志）

西なぎさ生き物観察ノート⑰ ニホンイサザアミ

ものがあり余るほど多いさまを“佃煮にする程”と表現したりしますが、ニホンイサザアミ（以下イサザアミと略称）はまさにこの言葉が似合います。「西なぎさ」で地曳き網調査をすると、バケツ何杯ものイサザアミが採れてしまう事が…。皆さんも潮が引いた後の海水たまりをのぞいてみてください。半透明で縞模様がある 1cm 程度の小さいエビのような生き物が群れていたなら、それはこのイサザアミかもしれません。

イサザアミは甲殻類の中で、エビとは違うアミ目というグループに属します。複雑なことに、名前にやはりアミと付くナンキョクオキアミは、オキアミ目というまた別のグループ。アミ類のほとんど

は、1.5 センチ以下の小さな生き物です。

一年中見られるイサザアミも、世代交代のため初夏に個体数が減ります。しかし、その後 5mm 程の若い小型個体が現れたと思うと、再び爆発的に増加。ボラやギマ、コチ、ハゼ類などの稚魚が春先から夏にかけて「西なぎさ」に多数現れますが、稚魚の数とサイズに合わせるかのように成長していくイサザアミのライフサイクルを見ていると、改めて自然はうまく出来ているなと感じます。

さて、汽水や淡水に棲むアミ類は、釣りをする人は撒き餌として身近かもしれませんが、タツノオトシゴや小型の魚が食べるのに丁度良いサイ



バケツで何杯も採れるイサザアミ

ズなので、水族園でも餌として重宝しています。魚やニワトリの飼料にされるほかにも、文字通り佃煮にされ、人間の食料として店頭で購入出来ます（インドではアミ類をカレーに混ぜて食用にするそうです）。魚たちのごちそうを、我々も食卓でご飯や晩酌のお共にいただきながら、身近な海へ思いを馳せてみませんか。（調査係 堀田桃子）

なぎさの小さなサカナ便り⑮ スズキ

いつもは「なぎさの小さなサカナ」をご紹介するこのコーナー、今回は数十センチをこす大きなサカナのお話です。もっとも、その稚魚もまた「西なぎさ」に来ているのですから、タイトルに偽りはありません。

葛西臨海公園の周辺は、マハゼ釣りのポイントとして、知る人ぞ知るエリアですが、秋も深まってくると、スズキをねらう釣り人を見かけるようになってきました。

最大1メートルほどになるスズキは、東京湾を代表する漁業対象種であるとともに（水族園でも「東京湾の漁業」水槽で展示中）、釣り（特にルアーフィッシング）の対象として、シーバスと呼ばれたいへん人気があります。また、季節によってすぐす海域を移動することが知られており、東京湾では、

冬になると産卵のために湾の出口付近まで移動するようです。そして、生まれたばかりのスズキの赤ちゃんは、成長とともに

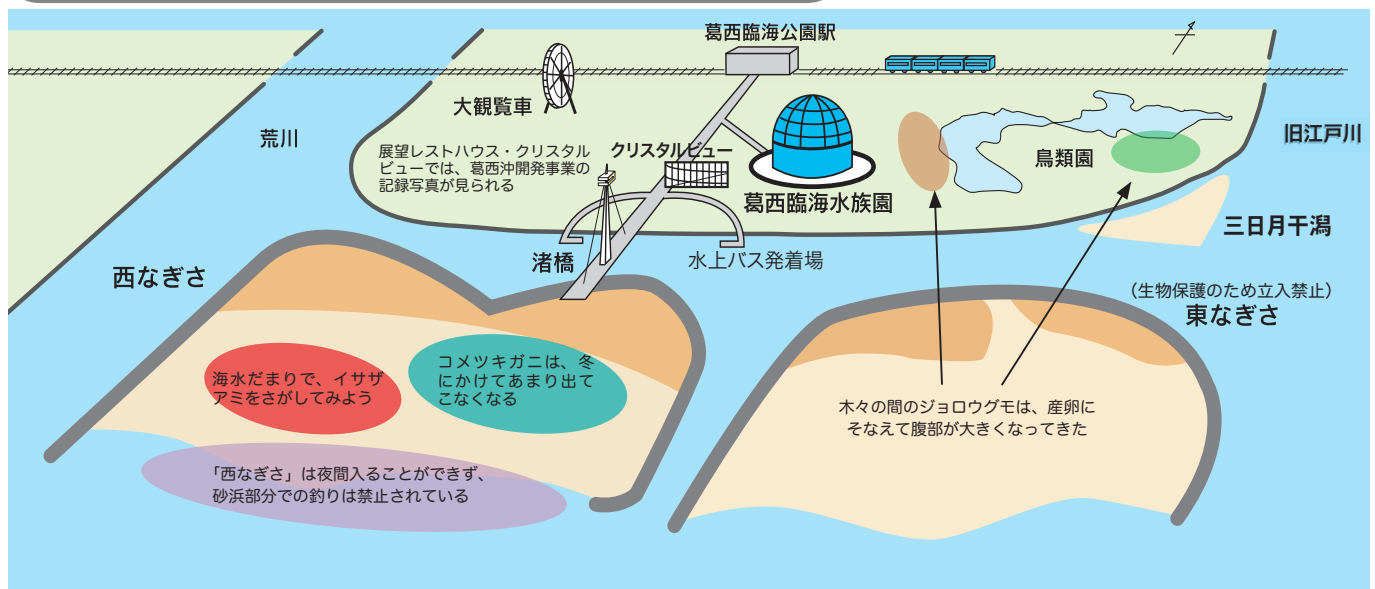
に湾の奥へと運ばれ、春になると「西なぎさ」でもスズキの稚魚が見られるようになります。「西なぎさ」で過ごす稚魚はおもにイサザアミなどを食べて成長し、夏には河川にも入りこみ、さらに秋になると川の河口や港湾部で過ごすようになるのです。

葛西臨海公園・海浜公園は、旧江戸川と荒川の河口にはさまれた場所にあり、スズキの餌となる生物も多く、また、2つの人工なぎさがあることによって複雑な潮の流れが発生するので、この周辺はスズキ釣りに条件の良い場所となっています。しかも、これからの時期には大型のス



ズキが釣れる可能性が高いので、みなさんもチャレンジしてみたいはいかがでしょうか。天候、潮周り、潮の流れ、水温、使用するルアーのタイプや色等々…。さまざまな情報を分析して、ねらいどおりに魚が釣れたときのうれしさは、格別のものがあります。ただし、よく釣れる時間帯は夕方から夜にかけてになりますので、安全第一で、怪我などされないよう、足もとにはくれぐれもご注意を。また、針や糸を捨てたり、「釣り禁止」「立ち入り禁止」の場所には入らないよう、マナーを守ってお願いいたします。（調査係 佐藤 薫）

秋の水族園周辺生き物マップ



●●●秋の西なぎさ●●●

「西なぎさ」に多くの稚魚が集まるのは、大きな魚が入ってこない遠浅の干潟であるとともに、「佃煮にするほど」たくさんいるニホンイサザアミがエサになるから。アサリやマテガイなど人間が自分の「エサ」を探していることもありますが、魚や鳥のほうはずっと多数派です。そう、ここは四季を通じた、「生き物たちのダイニングキッチン」なのです。

編集後記：今年は臨海公園の開園20周年。公園や水族園では、さまざまな記念行事をおこなっています。昔の記録のなかには、埋め立て前の葛西地区の写真もありました。地下鉄東西線の高架から南は、一面の海と蓮田（レンコンを植えた泥田）しか見えません。ほんの40年前の風景です。